

木の幼稚園 樹齢千年の木を蘇らせよう

私には、千年を経た木の苗木を育てる森林公園（木の幼稚園）の夢がある。ホモ・サピエンスが斧と鋸をはじめ、鋤や動物で土地を開墾して以来、今残っている木の中で、本当に古い木は数少ない。けれども、まだ一つ一つの昔の森の姿を、私達に想像させてくれる、巨大な木や森は残っている。それを目にする私達は、その偉大さに感動し、なぜ祖先が木を神々の住み家だと思い畏怖したのか納得する。



その森は、今何十億の人間が存在する為に、短い時間の中で再生出来る物ではない。しかし世界中に、同じ精神で繋がった森林公園を作ることは出来る。その公園には、世界中でも最も古い木の中から選ばれた苗木を植え、こうして次の千年がたてば、世界中の古木から生まれた木が、木の共同体(森)を作り、さらに年を経て、確実に未来のシンボルとなるだろう。残念なことに、ある一ヶ所に、すべての木の種類が存在する事はない。だからその木の幼稚園である公園は、まず自分達の周りの木の種類を使うしかない。けれどもそれでも充分だ：例えば日本の銀杏の木はロシア、カナダ、中国やヨーロッパでも同じように育つはずだ。これらの国のどこにも巨大な木が立っている。彼らについての素晴らしい本は数多くあり、私達に彼らの苗木の百年、二百年後の立派な森になった姿を想像させてくれる。その時私達が、彼らを見上げることが出来ないのが残念だ。しかし、私達は、その森を実現させる為、木の幼稚園を作ることに協力して、喜びを見出す事が出来る。

私達— それはこの発想に賛成し、信じて公園に適した場所（次の二百三百年安全な場所）が見つかり次第苗木を送り合う人々の事。

公園には、公共の土地が一番適してるように思えるが、個人所有の参加も考えられる。もちろん公衆の参加がなければならぬ、なぜならこの幼稚園の発想は一つ一つの木の種類を守る為だけではなく、これらの木を育て、世話し次の世代に伝える若者、もしくは若者の心を持つ情熱家で世界中を繋ぐ事である。次の世代に、私達生き物は、すべて等しく大地の子供であり、人間が高まれば小さい生き物にも大きな生き物にも生きる場所を与えることが出来る事を伝えなければならない。

文・ルドルフ フンメ
訳・上野まゆか